

まちで、利用する側の良識による判断が必要である。昔のものには私事性についての配慮がとほしく、復刻にあたってもそのままのものもある。私事性に配慮していく基準はわたしたちがつくりあげていかねばなるまい。

時をおなじくして、フランスの故ミッテラン大統領の前立腺がんがかなり前からのものであったことが暴露され、それをめぐって、医師の守秘義務と公人に関する情報の公開性とのからみあいの議論が展開された。当日の報告にはもらしたが、相馬事件の相馬誠胤の夫人の主治医戸塚文海を衛生局長後藤新平はといつめて、誠胤の診断書をかいた岩佐純は本人を診察していない(岩佐は相馬家の家庭医で、そのとき直接に診療したのは門下)、夫人は鎖錠であった(この点はうたがわしい)、ときだした。後藤はこれらを公表して、医師の道義にもとると、岩佐の無診断書作製を非難したのであるが、夫人の件についてはそのプライバシーを侵害したとして、かれ自身も非難されるべきであろう。

(平成八年一月例会)

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

小俣 和一郎著

『ナチスもう一つの大罪、「安楽死」とドイツ精神医学』

ナチスは、いわゆるホロコーストを行っただけでなく、ドイツ国内、国外で、精神疾患・遺伝性疾患をもった成人患者や小児患者を政策的に殺害した。いわゆる「安楽死」作戦、別名T4作戦である。ここで用いられた大量殺害の技術は、後にホロコーストに応用された。私は、医学雑誌に投稿した論文で「安楽死」作戦にふれたが、さらに文献を収集中、この優れた著書に遭遇した。敬意をこめて、この書を紹介したい。

日本でナチスの「安楽死」問題に早く注目したのは、精神医学者で作家の北杜夫氏である。氏の小説『夜と霧の隅で』(一九六〇年)は、患者が「安楽死」を強制されることに苦悩する医師たちを描いた作品で、北氏はこの作品で芥川賞を受けた。最近では、北氏の小説と似た状況をあつかったドイツの小説『灰色のバスがやってきた』が邦訳された。この本の解説にも書かれているが、ドイツ現代史研究者木畑和子氏が「安楽死」問題のすぐれた論文を発表している。また、「安楽死」作戦にもっとも抵抗したのが、キリスト教、とくにカト

リック教会の聖職者であったところから、ドイツ教会闘争(広義)の一環としてこの問題をとらえようとする河島幸夫氏の著書がある。医学者が書いたものでは「ホロコーストの科学」(原題「死の科学」)が邦訳されており、「安楽死」問題をあつかつてはいるが、全貌を描いたものではない。

一方、ドイツでもこの問題のくわしい検討は決して早くなかった。小俣氏がたびたび引用し、現在でもこの問題の基本文献とされるエルンスト・クレーの著書『ナチ国家における安楽死』が発表されたのは一九八三年であり、それを手始めに、最近になって多くの研究が公刊されるようになった。私の机上にも、ノルベルト・フライが編集した『ナチス時代の医学と健康政策』があるが、この本の半分は安楽死問題を扱っている。

小俣氏は、精神医学者としてドイツ留学中にこの問題に接する機会があり、それを出発点として、詳しい文献検討とたびたびの現地調査を行って、この著書を完成された。その記載は、精密詳細である。たとえば、私は論文で、ポーランドで精神疾患患者が集団射殺によって殺害されたとのべたが、その内容を具体的に示すことができなかつた。氏は、行われた場所、状況などをくわしく記載している。

これに限らずこの書の特徴は、具体的な史実を正確に記載していることと、ひろい思想的視野をもって書かれていることにある。「安楽死」問題を論ずるには、その前史、思想的社会的背景、政策の決定過程、実施組織とその構成員、実施

状況、その反響、戦後処理、倫理的評価などの記載が必要だが、著者は、このような点を系統的に記述し、学問的レベルの高い、しかも読みやすい、興味深い本を作りあげた。「安楽死」問題をそれのみに終わらせず、日本が体験した問題、他の国においておこり得る問題と結びつけて考察されていることも、ナチスの問題を考えるとき、なくてはならない観点である。

今後、日本の医学者、医史学者によって、この問題の研究がさらに進むことを望むが、その場合もこの書は恐らく基本文献として残るであろうし、一般のナチズム研究者にとつても貴重な文献となるであろう。

このような書物が生まれたことを、心から喜びたい。

(泉 彪之助)

(人文書院・京都市伏見区竹田真幡木町三九一五、電話〇七五一六〇三一―三四四、一九九五年八月一日発行、B六判、二六六頁、定価二四七二円)

山下政三著『脚気の歴史―ビタミンの発見』

著者はすでに一九八三年に『脚気の歴史―ビタミン発見以前』、一九八八年に『明治期における脚気の歴史』なる大著を刊行し、膨大な文献を駆使して、ビタミン発見以前の主に日本における脚気の歴史を詳述し、多くの注目を集めた。著者は東大第一内科にながく在って臨床医学に従事された脚気の